

新学習指導要領に基づく高等学校英語教科書

池野 修

1. 新学習指導要領に基づく英語教科書

新課程(平成25年度～)で用いられる教科書には、指導要領の内容及び改訂の趣旨を具現化したものであることが求められる。具体的には、(i) 英語による授業が想定されているか(生徒が英語で活動を行うのに有用な教材となっているか)、(ii) 4技能の総合的育成と統合的活用が可能な内容になっているか、(iii) 文法はコミュニケーションを支えるものとして扱われているか、などである。

「英語による授業」に関連して最も重要なのは、生徒が英語で活動する時間を多くすることである。教科書中に、様々な言語活動を行いやすいような素材文が提示されていたり、さらには英語で行う色々な言語活動が含まれていたりするのが望ましい。

「4技能の総合的育成・統合的活用」については、(a) 4技能のバランスと (b) 複数技能の組み合わせを考える必要がある。現行の「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」は、本来4技能を総合的に指導する科目であるべきなのに、聞く・話すは「OC」に任せておけばよいという誤解から、しばしば4技能のバランスを欠いたものになっている。新課程の「コミュニケーション英語」ではこの点の改善が必要である。また「英語表現」という別名称の科目が存在するものの、核となる「コミュニケーション英語」において、従来以上に「書く」「話す」の表現活動を充実させることが求められるであろう。英文を音読したり、筆写したり、和文英訳したりするだけではなく、生徒が自分の考えを英語で表現することも大切にしたい。また、授業の中心は教科書本文を「読む」ことになるであろうが、「読み」をどのように「聞く」「話す」「書く」に統合するか、そのためにどのような素材文や活動を準備するかという視点も重要となる。

「コミュニケーションを支える文法」という点についても、明示的に教える文法(説明)の厳選、言語形式—意味—機能のマッピングを促す工夫、言語使

用をととした文法・語彙「習熟」の促進などの点に従来以上に留意することが必要であろう。

2. COMET English Communication I の構成と特徴

上記の点を念頭に置きながら、COMET English Communication I の構成や特徴のいくつかを概観してみることにしよう。

まず、各レッスンは「興味づけ」の活動である Warming-Up から始まる。写真を見て、対応する英語表現を言ってみるという簡単な活動である。その後、リズムに合わせてキーとなる音素の練習を行う「英語の音作り」活動の Let's Chant! が続く。

ページをめくると、その課のメインページが見開きで現れる。左ページが英文、右ページが活動群(ワークシート的な役割も果たす)となっており、New Words, Points to Check, Comprehension の区切りごとに、生徒が活動をこなしながら、本文を繰り返し読めるようになっている。右ページの最後には、簡単な自己表現活動である What Do You Think? が配置されている。

全体として、活動にスモール・ステップを設け、少しずつ理解や習得が進むようにして、特に英語の苦手な生徒に「自己効力感(self efficacy)」(=その活動は自分にもできそうだという感覚)をもたせるように工夫している。

英文の題材の選択にあたっては「自己関連性」をキー概念の1つとしている。若者の悩み事相談(L3)など、生徒が当事者意識をもちやすいテーマや、世界で注目される日本の弁当(L2)、高校生が行う国際ボランティア「空飛ぶ車いす」(L7)など、日本という国や自分と世界とのつながり(関連性)に気づかせるテーマを取り上げて教材としている。

愛媛大学教授

(COMET English Communication I 著者)